



里見八犬傳

拾四編

卷三十



13
709
78



名者幾十人あり目今関の啓くを見て吐と嘯く。三七二十一。細入る。守屋をの関
卒小名告をある。懐き。実を合せ。関を推禁めて。大家もね喘り
る。辛崎の関を礎礎見わて。目今加勢と出され。事の關の鎮るまで。當所人の
出入を饒させ。疾退はね退き。と聲叫。酒りと制も。人受け。後れ。入
来る衆人。推れて。拍揮。ある程。親兵衛。七個の伴。當の事。紛れ。逸早く。守屋の裏
へ。准備の火索。と投。那。這。火。を。放。其。火。忽。地。煽。々。と。目。枝。の。山。風。吹
散。されて。猛。火。の。勢。以。軻。遇。突。智。の。暴。虐。似。る。火。害。誰。う。驚。馬。に。謀。る。當。關。の。士。卒
の。壯。者。皆。頭。人。鳩。宗。に。從。て。辛。崎。の。緝。捕。の。加。勢。出。る。後。れ。這。里。残
在。る。戎。兵。の。頭。卒。も。走。卒。も。老。て。鈍。多。の。十。數。名。今。這。異。変。心。慌。火。を。打。滅
も。欲。者。驚。に。退。く。衆。人。と。俱。不。慌。忙。に。逃。て。関。外。出。る。親。兵。衛。伴。當。是。不
い。く。便。宜。以。て。煙。裏。より。衆。聲。高。く。関。を。作。り。研。を。飛。を。逃。を。趕。と。急。を。け。れ。関。の

士卒の思ひはけり。敵は火攻せしむ。胆はれ心惑ふ。敵の多寡。省む。皆より。未だ。行客
も。皆。敵。へ。思。ひ。一。く。返。一。合。者。者。又。仍。客。莊。客。們。の。側。杖。打。れ。と。の。走。旅。程。趕
ま。て。幸。崎。の。関。を。來。ぬ。け。然。に。阪。本。の。頭。人。根。下。鳩。宗。の。老。松。惟。一。と。相。資。け。大
江。親。兵。衛。と。相。挑。む。闘。戦。の。勇。卒。も。那。阪。本。の。火。の。起。る。及。び。辛。崎。も。阪。本。の。其。路。凡
頭。上。す。遠。望。望。む。見。ぬ。鳩。宗。惟。一。兩。隊。の。士。卒。の。那。火。の。自家。の。裏。伐。て。敵。を。掖。入
と。関。を。燒。せ。て。入。逆。寄。る。今。這。大。江。一。騎。ま。勝。と。取。る。と。か。大。敵。不。攻
伐。れ。孰。く。免。る。者。あ。ら。ん。と。思。料。は。感。ひ。駭。怕。れて。立。足。も。大。津。の。く。逃。走。り。く。
大。津。の。加。勢。の。來。ぬ。大。杖。入。道。が。一。隊。の。親。兵。衛。是。が。為。小。找。と。必。新。自。方。不。推。戻。され。大
津。の。関。を。破。られ。け。主。客。の。勢。以。地。を。易。く。智。愚。と。勇。怯。の。差。別。ある。看。官。越。ふ。思。へ。
柳。大。江。親。兵。衛。の。蓋。世。の。勇。士。と。い。ふ。那。身。只。一。騎。也。之。關。の。士。卒。二。四。百。名。を。敵。の。挑。戰
ふ。時。立。地。不。敵。走。り。且。勞。せ。て。三。關。を。破。り。擇。る。理。の。あ。る。ゆ。ゆ。め。と。初。

八代傳九郎後三下

文藝堂藏

在る能く吐かれて。唯一と。鶴宗の唯々。と。その心。各親兵を従へ。塩尻近山塩の
塩の幸崎。阪本の関路を投て退る。大杖入道。稔物。生勇。角折れて。撞木。似る
証。敵。名。負。露。の。身。奉。加。帳。の。如。く。祈。佛。を。憑。り。果。敢。を。心。の。鬼。我。と。
蓋。て。丹。塗。の。つ。ら。り。世。を。不。娘。し。る。事。も。依。此。下。退。る。親。兵。共。侶。主。の。後。方。の
ま。ま。聚。合。の。伴。の。士。卒。の。不。足。を。權。且。補。ひ。け。登。時。政。元。八。又。聊。馬。を。找。め。て。馳。て。関。下。
其。親。兵。衛。も。亦。持。る。又。又。後。方。へ。托。地。と。投。棄。て。下。馬。し。て。找。を。近。は。程。の。大。杖。稔。物。
是。を。見。て。親。兵。を。守。屋。へ。走。る。則。登。見。と。草。棚。を。主。客。の。與。儲。る。政。元。急。不。推。
禁。め。り。今。日。送。り。私。事。に。豈。貴。賤。を。分。之。俱。不。登。見。を。用。ふ。と。を。親。兵。衛。敢。
其。連。の。不。固。辭。を。找。め。り。政。元。強。く。饒。り。親。兵。衛。只。得。後。登。を。得。ず。才。不。尻。城。
撤。け。り。悠。て。主。客。傾。蓋。の。野。席。を。定。り。親。者。情。地。小。相。稱。く。七。の。死。米。を。
有。悠。一。程。の。政。元。不。従。い。ま。り。姥。雪。代。四。郎。直。塚。紀。二。六。並。五。個。の。親。兵。と。那。七。個。の。伴。

當。浦。地。喜。助。大。伯。の。皆。遠。く。身。を。起。て。走。り。親。兵。衛。の。後。方。不。造。り。て。或。馬。の
鑣。を。合。り。大。鎗。と。建。甲。曹。樞。の。杖。と。解。半。七。齊。整。と。一。跪。坐。り。悠。而。政。元。の。亮。
女。小。親。兵。衛。を。向。ひ。類。稀。多。安。房。の。各。臣。約。束。違。は。ず。那。虎。を。對。治。の。事。形。迹。を。
我。既。不。目。擊。も。れ。れ。の。快。び。を。追。つ。不。來。ぬ。人。介。も。二。関。の。頭。人。も。勸。不。執。疑。
て。擲。捕。ま。欲。し。其。罪。孰。も。輕。く。不。開。日。謝。断。せ。る。我。面。を。願。て。權。且。用。捨。
せ。か。の。親。兵。衛。登。見。を。放。て。謹。ま。兼。て。答。る。中。分。不。過。る。御。懇。命。面。目。と。れ。不。優。に。
と。す。既。不。知。せ。ぬ。上。の。宣。解。も。小。人。談。講。合。の。頭。也。那。虎。を。射。七。擊。折。尋。來。不。
ける。伴。當。紀。二。六。を。那。里。不。留。の。守。り。且。小。人。も。今。朝。早。夫。小。身。單。幸。崎。の。関。不。造。り。那。関。
符。を。東。路。へ。過。ら。ず。欲。さ。ず。豫。證。据。の。與。不。虎。の。隻。耳。を。研。合。す。懷。不。く。懐。不。く。不。
送。ら。ぬ。見。あ。ら。ぬ。實。檢。使。を。請。て。遣。せ。其。人。も。見。が。り。欲。反。く。我。言。を。伴。と。す。
再。問。れ。も。猛。可。阪。本。大。津。を。兩。関。令。不。謀。合。多。く。捕。捕。ま。せ。れ。已。上。を。治。を。擊。

八代轉心昇卷三下



八代傳九郎卷三十一

文安堂藏



大津の驛
稍盡處
親兵衛
政不辭別

八代傳九郎卷三十一

文安堂藏

向を定め、漫々三條大橋の邊まで来ける時、和郎の伴當姥雪代四郎與保若、雪吹姫の死を救ふべく載て邸へ送り來ぬ。不逢ひけり。あらず。徳用堅削、虎狼野心の事の顛末、且他等の姫を竊出して白川山なる敗堂へ、總ひ折那虎撞見と。徳用の隻腕、堅削の隻脚を喫れ、仆して存り。雪吹姫も氣絶して、又活べず。あらず。さう、和郎の伴當の内中、小重なる姥雪直塚、門六七名、和郎の先途、不遇と。昨日、歇宿を立ち、白川山、夜を深く、尋も逢む憶ひ。那敗堂の頭、小重、曇る。代四郎が、和郎を受、うと云、神某、とく、姫の死を起し、又直塚、紀二六、その某、とて、兩個の悪僧、小の、を、謀りて、他、日、屬の、詭詐、毒惡の、趣を、知、を、云、後、の、這、一、椿、事、の、敗、堂、小、留、置、れ、兩、個、の、伴、當、が、信、々、と、告、る、ふ、り、て、我、も、亦、知、る、と、云、る、は、抑、徳、用、堅、削、の、和、郎、小、甘、舊、怨、ある、を、も、屢、詭、言、を、我、の、一切、信、容、れ、ど、然、り、け、れ、ど、も、其、言、の、皆、伴、當、の、思、ひ、と、和、郎、を、疑、ひ、小、重、は、結

城遣、る、那、兩、三、個、の、間、諜、兒、が、昨日、曉、氏、自、か、り、來、り、報、一、那、地、の、實、説、を、思、ふ、徳、用、が、言、巧、多、密、訴、の、都、く、談、を、開、を、和、郎、が、以、解、す、と、く、吻、合、せ、る、と、然、る、と、我、淺、慮、る、徳、用、の、俗、縁、深、に、始、母、子、を、萬、喜、不、就、く、い、と、漸、心、く、思、ひ、さ、る、醒、々、憎、さ、も、百、倍、明、日、の、那、奴、が、罪、を、糾、て、仇、と、懲、え、と、思、ひ、の、奇、事、も、や、あ、む、む、ぞ、ん、け、其、夜、の、中、小、又、幾、層、の、惡、事、を、做、す、眞、罰、觀、面、同、惡、の、徒、弟、堅、削、と、俱、半、體、不、具、亦、り、て、も、尚、死、が、一、の、儆、戒、を、世、無、余、神、慮、佛、意、の、奇、事、も、や、あ、む、む、ぞ、ん、此、は、我、行、心、を、和、郎、の、勸、解、る、怠、状、の、要、畧、の、且、か、の、如、一、却、昨、宵、我、の、中、途、あ、く、姥、雪、代、四、郎、等、不、逢、ひ、時、隨、即、伴、の、老、黨、小、雪、吹、姫、を、受、合、せ、る、と、士、卒、を、分、ち、冊、け、く、邸、へ、遣、ら、猶、又、思、ふ、れ、路、疾、走、る、伴、の、近、習、小、分、付、く、星、裏、小、虎、の、脱、去、を、那、菊、軸、を、以、相、と、共、不、疾、の、て、來、よ、と、い、そ、ぐ、又、西、陣、へ、走、せ、け、り、徳、而、我、身、の、自、餘、の、伴、當、を、從、へ、く、代、四、郎、等、を、御、導、ふ、事、那、白、川、山、の、敗、堂、未、來、て、見、る、果

八代轉心軍卷三
九
の文藝堂藏

徳用堅削の隻又隻脚を傷り喪れて。結紐られ。樹下居り。并をもち守る代
 四郎の火家の伴當三名在の。這餘の伴當直塚紀二六が箇様々の筆計を
 件の両悪僧の奸虐。竊盜の顛末を招了致さる。と云且紀二六を和郎の
 件。事の趣を告ま。欲し。索て山路か。入り。其崖略を告。我則伴
 士卒七八名。若們。這徳用堅削を西陣へ吊り。有司告。牢獄を敷。は。と
 せ。分付れ。其者則。其頭を。藤蔓を。找合。早く編。壞籠。造。軀
 兩個の悪僧を載。四個の奴隷。不。西陣へ領。有。一程。我西陣
 郎。主僕の。盒子。偏提の。酒前。茶。士卒五六名。索。あ。未。れ。我
 件。の。敗堂。偏提。を。夜寒。凌。且。姥。雪。代。四郎。們。都。和郎。の。伴當。の。當
 晩功。酒。を。合。我。伴當。の。各々。盒子。を。受。是。を。喫。代
 四郎。其。火家。の。五個。の。準備。の。盒子。あ。開。を。合。夜。食。を。登。時。我。又

思。御。向。徳。用。謀。合。仁。を。相。敵。ま。正。生。景。紀。真。賢。經
 緯。直。道。同。士。敷。ま。て。反。其。隊。の。親。兵。の。為。の。親。兵。衛。が。上。取。り。て
 之。の。後。見。け。れ。我。偶。あ。ま。親。兵。衛。が。虎。を。對。治。あ。否。を。見。も
 せ。か。去。入。選。憾。非。如。天。の。明。る。も。山。又。山。小。つ。け。入。り。逢。死。を。思
 ふ。あ。代。四郎。們。我。伴當。も。宣。示。つ。遂。敗。堂。を。立。出。馬。を。山。中。越。の。つ。找
 る。程。白。川。村。中。天。の。明。け。の。浩。如。前。面。より。來。ぬ。里。人。路。備。を。跪。我。伴當。告
 せ。恐。相。公。の。西。陣。る。管。領。様。あ。見。ぬ。上。一。椿。事。侍
 方。僅。談。講。谷。の。邊。中。大。江。殿。の。伴當。直。塚。紀。二。六。と。喚。做。若。堂。黒。不。馬。ま。ま
 其。所。以。の。箇。様。々。恁。々。天。の。曉。天。親。兵。衛。が。那。景。虎。を。那。里。射
 敵。死。と。云。事。の。光。景。を。隨。告。訴。又。宣。示。那。直。塚。の。い。れ。海。早。く。西。陣。の
 御。館。へ。の。告。を。告。大。江。主。の。咱。們。を。留。め。虎。の。體。を。守。ら。主。既。小。歸。東。城

急いそにあててよわく待む平崎のうへに赴かぬの義も迷ふ上よいれふも
 然さらに感かんじて走りてあまる程折も又とく相公様の出まりける逢あひ逢まり一幸あらむ
 幸さいふとのをうち雪き代四郎門が飲び涯りるあらむ我も亦怡悦ふ堪ぬ疾談講谷ふ
 赴まり驚れ虎を見み思おもひ先伴の青侍二名を召す若們舊路を走りかつ昨ま日の
 宵べ我中途より伴の近習を曳返して那菊軸をとり来よと分付る其某甲の来ぬ
 る逢ひ俱して談講谷へ参るとあらむさらに又伴侍の近習の一腸波
 波と伯部十郎真忠を口に爾の這白川村を莊客と言ひ召聚合談講谷へ領こ
 参まれ我其夫役の骸を早く京師へ齎して兩御所刺山の憲覽を歎ます且
 浴内浴外を貴賤を見せ後をまの話柄を做す欲ま疾速せと分付て殘し留ま
 る我亦連り馬を早むれ代四郎自他の伴當も心勇とや考へ後者の後の
 我伴當の寡の半分を雪吹姫に隷遣し其後も亦路次中所要を課せん

既また我亦件の里人を御導す朝日山峽を昇り時候談講谷へ來けけら
 姥雪代四郎先を走り則紀二六を生り雪吹姫の歸館の我早く來て虎を
 檢査す事の便宜を考へ紀二六を升をうち雪吹姫に相迎へ馳て我馬前見え
 参まり登時我馬を下て紀二六を訴を听し和郎の射法の今古不類稀きの其智恵
 慧も亦當意即妙虎へ兩眼を射れ故に矢場不整れちと云我其言を听果て隨即件
 件の虎を檢査す其小大犢を等し并が左右の眼を筒比深く射れ鏃積りて赤松の
 幹不滅れ仰反在り且其頭を注める如し和郎不撲れ痕を留め但其隻耳を留
 め我訝り又の美を問ふ紀二六則恁と答ふ因り肇て知ぬ并も亦人の及
 所和郎の遠慮の深に感ず我代四郎們伴當都て虎を視つ又其言を
 側目で愕然とて數馬を小感嘆せる所の恁而紀二六火家の伴當の乘馬
 たる盒子と一箇受會て樹下へ退く我急に召返させ他が功を譽言且勞ひ持

甘偏提酒餘の尚餘あるを令るせむどして夫役毎の束縛を族し小既すく已牌左
 側ふ波々伯部十郎真忠の白川村多莊客と二十名許俱して来り又昨宵所要我
 分付く途より郎入還り近習某甲の那菊軸を携方々白川村より迎の為小走
 去る青侍某ひと俱小束まけり他ごと遅りい我去向を空さりい糸托ちとら
 あふ至りく虎を視る件の近習青侍白川村多夫役們もうち教馬多和郎の射
 執云を感ト稱て喋々うち登時我又波々伯部真忠小課く虎の眼を射て串れん
 二條の箭を抜さふ其箭前松の幹係りく入ると極て深けれ輒の脱ざりい真忠は
 人小捷れく筋力ある壯士るれ取くや思ひけん矢筈を左右小合を緊て隻脚を虎の匈
 前へ踏掛けり身を反りく曳々々と曳く程お丁と掖抜く卻舎と打れて那身も其二
 條の箭を持さく仰さふ背を撲して撞と滾べ大家咄と笑ひけり當下夫役の莊客
 五六名列卒繩を解統ね我々寄々虎の四足を一緒小令りて括結んとまある程小怪むべ

件の虎い忽馬とくわむぞ做りぬ壁煙の滅る如く往方も知ぬ奇異不可思議只
 是のふあむをて近習が持る菊軸の相宛絹を列衣く如に其立腕小响れん憶む
 箱を合る落せ衆人驚馬に且怪てあち乍麼いふとさる呆れて俱小忙然り姑且
 去て我思ふ那虎の故画の变化の初眼小點せり故に靈備りて出泉それとも既小兩
 眼と射串れて瞳子と喪いられれば其靈鎮りくるる心も其形像尚その儘で
 ありける勇士の弓勢神を通て妖小勝つ徳われりむ是不就ても大江仁の凡夫あぬ
 這妙の奇を信と前知せられも我宿念あるどり昨宵中途より近習を返して那
 菊軸を合る束せり萬一の時疑い解とあらん欲とく思ふ心もうち出て衆人小宣
 示し我より違ふや否疾との菊軸を削りて見よと小近習いあちぬて菊軸を懸
 其頭を樹の枝小掛けり王僕齊一うち見る果して虎の画幅小復りて形状初小異る
 るとく其眼も亦初のどく白眼小して瞳子も余る和郎が那時小斫合る喪と云佳又

耳の嚮ふ見し時みのりると虎の画幅とら復あきぬるく不及およびてまるみ一耳みも亦まれまるま只ただ其刃そのやぶの迹あと
 多おほくま一ひと隻ひと耳みみの刀痕やぶありま聊いさ連續つらせまるま不い似まらまずま愈い悟まるま和わ郎らうが懐なごみま
 虎とらの隻ひと又また耳みみのあらまるまりま一ひと定ま所ところ以もつてま那あの隻ひと耳みみの逸はな早はやくま菊きく軸じくの復またりまりまけまをま用もちひま見みぎま
 誰たれもま知しらまずま後のち不あ其ま全體ぜんたいのま入いるま不あ及まびま連つら續つきまけまるま證あ據しはま隻ひと耳みみの刀痕やぶありま亦是ま大おほき
 奇あとまのまつまべま是これをまふまけるま自よ他よの伴とも當あ代よ四よ郎らう紀き二に六ろく真ま忠ちゆう者しや士し卒そつ夫ふ役やくのま至いたるまもま噫あ嘻あ
 とまらまふま感かん嘆たんの聲こゑをま合あひまくま散ち動どうけり登のぼりま時とき我われ又また思おもふま約あ莫なはま大おほ奇あ大おほ幸さいのま皆みな是これ
 和わ郎らうの武ぶ德とくをま上かみ下しも安やす堵との思おもひまをま做なすま不あ開ひらかま儘まま東あづまへま遣やらま愈い我われをま護まもるま者ものの
 恩おん怨おん心こゝろ當あ買か四よ罰ばつをま差さ別べつのま訛まがをま免まれまるま不あ如ごと大おほ江えの関せきをま過すりま東あづまへま馬うまをま找たるま
 後のちれま伴とも當ああるまれまいまもま遠とほくまいまくまぞま我われ追お追お蒐さるま是これもまのま奇あ異いをま告つぐまもまあまるまべま功い不ま答た
 送おくりまのま受うをま果はえまとま既すで不あ尋たづ思おもをまあまりま久く要まるま不あ了まるま一ひと莊むら客きやく多おほくま不あ則すな身みのま暇あひ戎じゆう
 取とりませまるま白しろ川がは村むらへま一ひと去いきませまるま近ちか習じやく小こ件けんのま菊きく軸じくをま持もつま代よ四よ郎らう並なら自よ他よのま士し卒そつとま相あ

従したがへま馬うまをま早はやめまるま山やま中なかつ村むらまでま来きぬま程ほどみま土つち民たみ歎なげ雨あめ三さん名な路ぢ傍はた不あ立た在まるまうまちま譚たんふま言ご
 耳みみのま入いるま一ひと伴とものま近ちか習じやくをまもまてま問とひま自よ今いま辛しん崎さき阪はん本ほん大おほ津つをま関せき令れい等とうがま一ひと個ひとのま勇ゆう少せう
 年としをま搦な捕とむまとま三さん隊たいのま士し卒そつとまちま合あひまてま閉し戦せん及およびま折をりま間ま阪はん本ほんのま守まも屋や不あ失し火かありま敵てきの
 所ところ為なるま思おもひまけまんま件けんのま緝しやく捕とのま士し卒そつ們らのま鬼おに胎たをま抱かかりま枝えをま折をりま反かへりま孤こ敵てきをま敷敷破やぶれまてま
 大おほ津つのまとま走はるまとま云いふま兵へい火かのま煙えん見みえまるま是これ不あ敬か馬ま我われのまとま代よ四よ郎らう紀き二に六ろく开ひらかま火か家やの
 伴とも當あ胸むね安やすくまとま共とも侶り我われがま馬うま先ま走はりまてま山やま中なかつ越こえまるま湖うみ水みづのま方かた甘あま鷹たか直ちやく不あ走は下くだりまとま
 我われもま亦また馬うまをま走はるまとま早はやくま辛しん崎さきよま来きてま見みれま阪はん本ほんのま兵へい火かのま煙えんをま滅くせまるま因よりま士し卒そつとま多おほくま
 分わちまてま那あの火かをま滅くせまとま遣やりまてま遺いるま不あ其ま里さとよりま我われ不あ相あ従したがひま代よ四よ郎らう們らとま我われ伴とも當あ波なみ々々伯はく部ぶ
 十じゆ郎らう真ま忠ちゆう者しや八はち個このま近ちか習じやくとまれまのまとまをまてま這こりま方かた馬うまをま輩たぐひまくま瞬ま息いき間ま不あ短たんくまとまあまるま三さん
 関せきのま頭あたま人ひと等らをま叱なりま林はやし示しめてま和わ郎らう不あ對たい面めんのま本ほん意いをま遂すえまるま抑おさりま和わ郎らうがま大おほ功こうのま是これ前まへ未ま聞きのま奇あ
 事こと多おほくまれま萬まん金ごんをまもまてま普あ買かするまとま尚なほ足たりまとまままるま不あ知しやま又また和わ郎らうのま伴とも當あ姥おば雪ゆき代よ四よ郎らう直ちやく

塚紀二六等。雪吹姫の死を救ふ。悪僧徳用堅削。竊盜奸虐の趣を送る。招了
 致さる。這大功も萬々金皆我。その良平也。賞禄を數ふ當れ。いふせん。和郎が
 本性の清白も。曩も我屢取せる。名刀衣裳珍器も。其時毎。嘗も管も。関て敢
 一箇も用ひ。別小位。嘗も管も。志を舒。示して。我も返せ。といれ。う。嘗も管も。訴。ある。あ
 美。昨日。曛昏。我。夢。知。りて。感嘆。の外。然。今。億。萬。の。賞。禄。も。和。郎。も
 必。受。く。ら。む。這。義。我。異。日。將。軍。家。小。少。え。上。御。制。度。依。ん。既。相。別。れて。各。天。の。一。方
 其。の。美。も。容。目。易。う。ざ。れ。が。我。み。づ。ら。和。郎。を。送。る。不。敢。高。下。の。礼。を。用。ひ。む。賢。者。を。貴。ぶ
 心。操。り。同。輩。對。坐。の。美。因。る。是。萬。一。の。褒。賞。へ。先。那。勳。軸。を。展。覽。せ。と。い。ふ。近
 習。い。あ。ら。り。て。件。の。勳。軸。を。相。与。り。申。して。開。け。卒。と。ら。ち。向。る。親。兵。衛。の。唯。々。と。い。ふ。言
 兼。あ。る。画。を。規。る。現。其。虎。の。耳。刀。痕。あり。名。画。の。彩。筆。活。る。像。く。白。眼。お。て。瞳
 子。る。け。れ。猛。虎。の。形。勢。正。是。靈。あり。け。は。も。偶。然。さ。る。と。思。へ。只。願。小。感。嘆。ま。の。時

まも。政。元。の。後。方。侍。り。る。大。杖。入。道。を。の。隊。の。野。兵。も。件。の。奇。談。と。靈。画。の。證。据。を。え
 け。聞。け。駭。然。感。して。勅。惟。一。を。援。けて。大江。を。搦。捕。す。欲。あ。疎。忽。を。今。ま。差。度。て
 悔。い。思。ひ。け。り。德。而。近。習。の。件。の。勳。軸。を。卷。け。箱。不。藏。れ。親。兵。衛。の。恭。く。政
 元。も。朝。ひ。最。詳。る。御。示。談。中。君。が。御。好。意。の。過。分。を。兼。り。且。靈。虎。の。絹。入
 子。と。見。せ。ぬ。一。期。の。欵。ひ。何。事。欵。是。不。價。ま。然。然。け。れ。も。虎。を。對。治。の。一。椿。事。の。則
 臣。等。が。所。為。お。り。て。臣。等。が。功。の。い。つ。も。拭。向。の。最。も。畏。れ。今。上。皇。帝。並。將。軍。家。の。御。聖
 德。と。仁。義。忠。信。を。宗。と。せ。る。寡。君。義。実。義。成。父。子。の。餘。澤。も。且。名。馬。走。帆。の。進。退。如
 意。の。幫。助。の。ひ。ひ。け。む。然。る。と。あ。る。御。賞。美。の。當。り。と。い。へ。但。姥。雪。代。四。郎。直。塚。紀。二
 六。們。が。不。用。意。の。姫。上。の。御。窮。厄。を。拯。ひ。ま。り。一。掙。の。仁。が。光。を。増。ま。く。や。い。む。聊。其。功
 あり。似。う。那。代。四。郎。與。保。の。大。山。道。郎。が。舊。舊。僕。る。一。不。是。裏。も。大。功。あり。と。い。ふ。瀧。田。の。老
 侯。執。立。當。君。不。諫。め。い。ふ。則。仁。と。同。藩。の。士。の。い。へ。も。仁。が。與。傳。母。に。似。る。因。ある

関令等が抑留せざる恒例と主和郎是を去向る其地の関令們示さる路次の
凝滞あるべしと解諭し取られ親兵衛の遠く杖寄り受戴せざる思はる
御賜那周公の指南車小勝り便宜を為さる然る百言千言の盡しはるべし
本も時移りぬるべし別れし卒脚馬小乗らるる麓を此下退き鈴を懐小夾
まの政元尚登見を放し登下親兵衛御中既ふのけし今日の送行の貴賤の差
別る和郎も俱小馬小乗らるる我も御騎らんと強て立気色をけれ親兵衛殆困
果て命の御意に従ひまろし這龍遇ふ就て意願した一差あり二関の頭人の失策の虎
実檢せざりける其使者の等困るん恩免あるまほしけれを政元も言て其受も既ある
なり卒共侶と身を記して牽寄る馬ふらち跨れ親兵衛の些退きて徐馬小乗らる
當下代四郎紀三六も親兵衛當齊々と一霎時政元と目送る波々伯部十郎代受て
主の後方小従ふる西と東へ別れ路最大栄ある勇ま功を感する者あるなりける

第百四十九回 石薬師の堂の賢少年朝賞と辭ふ
東山の銀閣小老和尚騎君と醒き

その日大江親兵衛が天津の関の邊邊で管領政元小辭一別年八亭午過る時候
より一は是より亦復馬を早め連小路次をそび下晡まより程又七八里の路を
走ると今の石部小遠く雁南山の麓路あり高野林の名小一負ふ大野の六地藏
堂の頭小者よけり登時親兵衛馬を駐りて左右小立る代四郎と紀三六もふり
やう我へもあれ各ハ昨通宵山路の峻岨を歴き這里まで来ければ然るその疲勞
をこらけんか知又甲冑櫃を肩小一行囊と馳る奴隸の毎の辛苦を思ひあはる
らる今宵の這頭小人馬の脚を休め逆旅の準備を做さんと云ふ代四郎紀三六も
くふべと云ふ隨即親兵衛若黨と相謀りて又幾町も程小白屋まで中
廣より客店ありけり其庭門より觀入る小馬を敷糸く宛処もあれ則這里宿を

投め主僕與る坐席二間を借得居り奴隸ハ名馬走帆と昔門多厩櫪牽
 入れて豆草を飼ふ程小日の暮けり悠而主僕迭代浴俱夕饌を果せ久親兵
 衛ハ代四郎と紀三六と五個の親兵七個の伴當と身邊へ招集令々久京師ハ
 存一程の心疲れを問慰め且昨宵の掙を賞する代四郎並親兵伴當們と
 昨宵親兵衛と談講谷々虎と對治の為体及那緝捕の関今もと數走
 らける事の顛末と知るより一御堂管領左京北政の親兵衛と問答
 其崖略と被されと側聞あれども小造りと猶其事の詳を知らず
 奇特を感しける并中伴當們ハ紀三六が昨日も京師ハ在りける事情を訝
 く思ひ一是も亦親兵衛の先見遠慮あるもの情地他を照文ハ借得別
 店ハ在りける其秘事さぞ知り驚くまほ嘆唱多疑の霧重啓け又公
 よりもさやと親兵衛さ々と合咲さる紀三六を見かへ直塚ハ思ひけん和

郎ハ久々那郎ハ賣買の為出入あれ雑色足輕奴隸の毎大々る面善
 られ久々御高政元主の伴當認り者る一秋と向ハ紀三六然ハ那官
 領ハ従々小可大津ハ造り一時の主の伴當分散して近習八九名ハ過さけ
 面善の久々其已前談講谷々小可見参る折ハ走卒奴隸ありといふも
 虎の奇魂ハ胆と淡々皆混雜の中ハ折れゆも心ハ屬さけ我ハ認得他
 亦怪む者ハ代四郎と事ハ倭合幸ハ折ハ幸ハ幸とハの
 昨宵雪吹姫を送る時直塚ハ那郎ハ憚れ小可が姫上の伴ハ達け
 料ハ中途中主ハ逢ひも一箇の幸ハ悠而敗堂ハ造り折直塚ハ那里ハ
 在談講谷々奇異煩雜の中見参入り雑色ハ走卒奴隸ハ心ハ
 在直塚ハ見ても見ざる如く其事と知るより一御堂管領ハ幸ハ幸ハ幸ハ
 亦ハ聲を低め喃大江主ハ直塚ハ下司ハ生れさ下司ハ實ハ

崎主の怪とてつるものひたす故に怪とて箇様々と其けが親兵衛屋敷頭で然
 むむさもあるべし思ふ倍る這回の揮は才畧都て那機稱すよく成る事
 異日稲村へかへ参らば必よ空え上恩賞思ひの隨多べしと紀三六羞慚を
 頭を低く默然する當下一個の伴若黨行燈の背より膝を找め親兵衛告
 やうのまごせあるま昨日小可毎の姥雪主の指揮およそ早く三條寄敷店と立去
 りその腫は目那木牌をりく幸崎の関を過り一程もく日の暮るれば阪本の鏡
 されど只得其頭露宿して夜を明しひい小這朝阪本の関の頭人士卒が幸崎へ
 加勢あり御身を搦捕んと人馬を生事紛ふといふ傍を見くは是を漕
 地喜勘太の巫の弄討に従ひ守屋の替火を放り忽地自家の勝利は做て
 関の士卒と客們的逃るを趕々來りける程も憶も姥雪直塚と野兵達の政元ま
 従ふ大津へゆく逢ひは則主の伴の近習大江の伴當と告す俱せられし

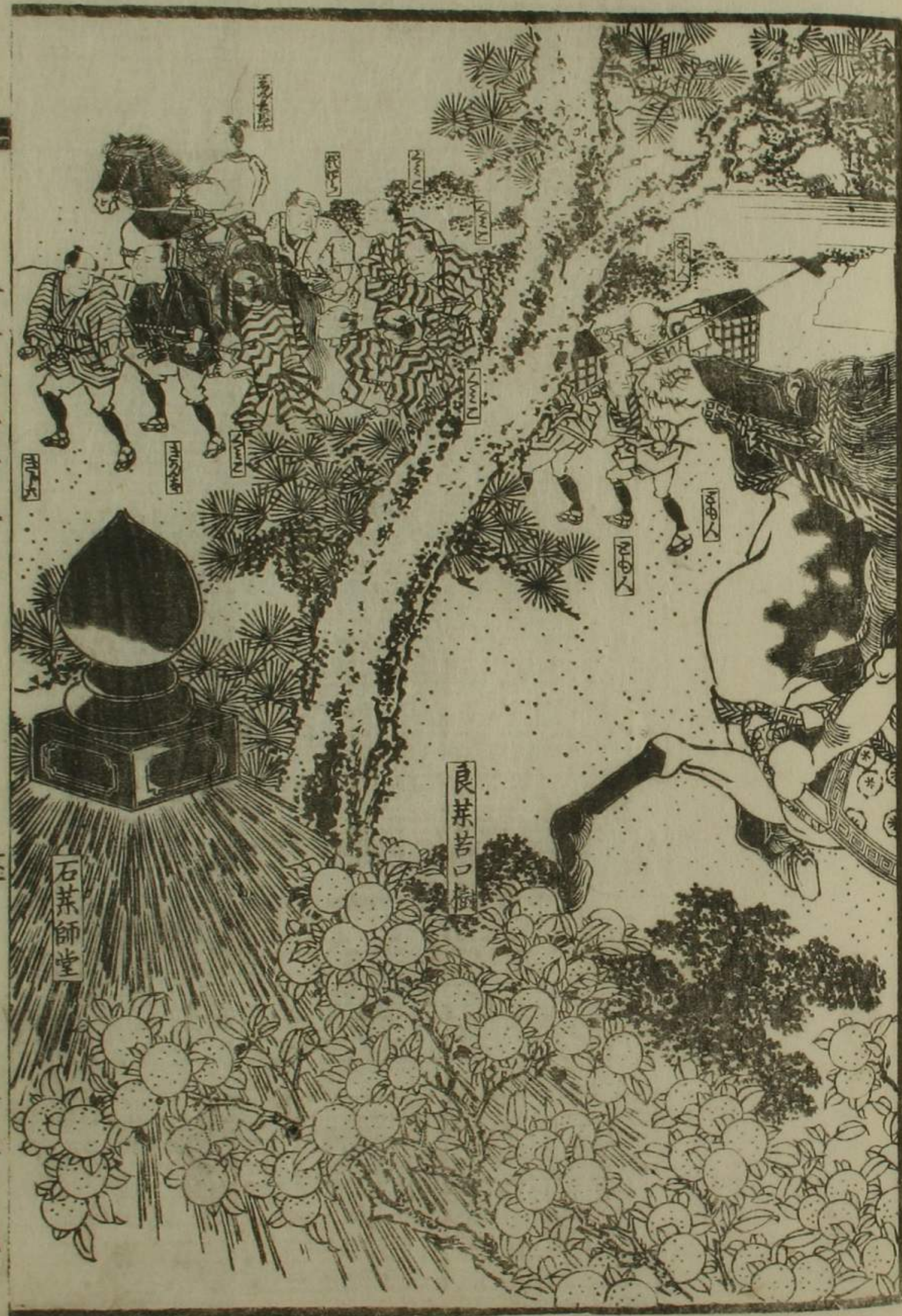
是と云ふ喜勘太語と接す那時関の為体と思ふ早く幸崎の関より謀合せ
 ちやあるけん已牌及ぶま人の往還を饒まひ関門の閉と待不候は客及地
 方の莊客の聚合するがまあり然人馬の出る不及稠入る者の打撃せが自家の
 便宜ふはたと告るち聞く代四郎紀三六野兵們的の親兵衛深く感じ
 喜勘太向ひくや肇て歩知る和郎が良策も直塚の亞流るべし一時の大功
 且自餘の毎の能と媚まを立地密議一致の大功成り一賞する尚餘
 であるの異日兩館へまう上幸脚沙汰あらむ恩賞孰も疑ふべし今と諦
 せ我の口那火便宜をゆるし則是姫神の真助を思ひの野夫中も倍
 功の者のまを悟る由るをける微妙の又只是のまを直塚と云漕地と云始終馬
 脚を露さね後々まも那毎の必知るよるまへ鳴呼妙哉と惜め感
 嘆斜るるれば代四郎野兵衛も感して已ま紀三六喜勘太伴當も回目

幾身小餘の。當りかと思ひけり。姑且て親兵衛の勤壯の財囊より一裏金
 一百十數兩を合出。是を代四郎等示しての。這御金の裏に我使命を
 奉りし時事ありむ日の準備せよと。老侯の賜りし久く懐かき事ども。政元
 主の抑留せられて。那郎不在の一日の衣食不置。これ敢用する所ありて。舊の
 事。今なきあり。因る意の明日より。いづれも。京師へ遠くをぬれ。那里の
 事の後易く。去れども。去向。猶新関。と聞り。幸ひして。政元主の路の次。負ふ
 とて。貸ひける。驛鈴の我。晋在り。ある。勘合の印。ひとく。路を。放。関を。過。ゆ。
 朝勝の上。へ。い。ども。応仁以降。諸國。乱。ま。諸侯。割居。の。今。の。世。の。天子。將
 軍の命令。も。仍。れ。る。所。あり。信。れ。が。又。去。向。ゆ。不。測。の。異。変。ある。べ。し。然。是。も。亦。知。る
 べ。し。去。向。ゆ。又。事。あり。我。主。僕。相。續。を。四。落。八。散。を。し。も。あ。ら。何。残
 の。食。を。求。ん。負。む。所。の。盤。纏。の。各。も。然。心。の。准。備。の。これ。は。は。け。れ。ども。

此を宜しと。信れが。今。の。御金。を。配。分。して。各。の。盤。纏。せ。ん。亦。館。の。御。恩。の。と。と
 の。も。裏。を。啓。金。を。數。へ。先。代。四。郎。の。二。千。金。紀。二。六。十。五。金。喜。勘。太。十。金。五
 個。の。親。兵。と。一。個。の。伴。若。黨。各。七。金。の。餘。の。伴。の。奴。隸。毎。々。各。五。金。を。取
 り。尚。幾。金。の。残。り。を。そ。の。伴。財。囊。に。藏。り。又。懐。中。に。あ。る。は。當。坐。に
 賞。禄。を。悟。る。も。悟。り。ぬ。り。も。その。ゆ。の。理。の。素。より。廉。直。を。宗。と。せ。る。代。四
 郎。を。辭。由。る。恭。く。受。戴。せ。り。和。子。の。遠。謀。宣。ふ。以。あり。今。の。權。且。預。り
 措。路。を。用。る。所。あり。異。日。安。房。へ。歸。着。の。日。必。返。り。ま。る。べ。し。と。答。へ。懐。へ。來。ぬ
 け。り。代。四。郎。ま。り。か。の。如。く。誰。れ。誰。れ。亦。推。辭。せ。ん。皆。共。侶。不。受。攸。め。感。謝。の。堪
 ぬ。る。ら。し。當。下。親。兵。衛。又。の。今。宵。の。歇。店。の。廣。身。を。且。斯。歇。の。行。客。を。
 主人と奴婢の居処と。大牙相接る。あ。ら。が。密。談。を。做。ま。し。い。ども。洩。る。事。な
 べ。し。然。が。去。向。を。政。元。主。の。上。の。京。師。の。噂。を。是。謹。慎。の。第

一義之各々の意をゆるるべし。我厄既に釋せよ。帰心愈夫の如し馬の千里の駿足
 るれば一日の安房へ還んよ。容易くはく思へども各も亦我與に要るは京師に淹
 留あり。百日有餘を過せし。今ゆく中途に捨て。我の軍先あり。歸國を
 いそぐ義にわらざる。後れが明日より路の程一日の十里。一里とせよ。をゆくとも年の内
 あり還り易く。その義もあらわらば。と云ふ大家感服し。左も右も神とま
 じ和君の意見に従はらんや。食養りゆひぬと答ふ間。鎗々と人定の鐘の聲
 暢ひ来り。いと幽く夢さるる。親兵衛の幾番と鳴る。堂の音稍安え。店
 小二が来り。臥草儲をいそいで。各枕に就せよ。後而其詰朝大江主僕
 十六七名の早天より起出。早飯を果し。房錢を還る。程小奴隷の名馬
 走帆小秣を飼く。各々約装をせよ。身甲まどの武具を要せむ。皆庸常
 る打槍あり。喜勘太も兩個の若黨の馬の左右に従ひ。紀二六と後を跟さ

代四郎の先あり。鑣奴鎗奴甲冑櫃柳に相約する。各其職役あり。皆親
 兵衛の相従ふ。俱に歇店を出る。故郷へは遠く。一日十里と定め
 る。敢いそふあらねども馬の駿足るをり。その日未下刻早くも十二里の路を
 来り。伊勢の境に入り。石茶師と字せる。一村落を過ると。路の右に小
 座の佛堂あり。石像の茶師如来立せぬ。地方の字小喚ぶる。親兵衛
 あれ造る時憶も馬を駐め。先立る代四郎を告め。喚ぶる。馬の
 心のつらり。狄那靈虎の来歴。丹波國素田郡茶師院と喚ば。村の一佛寺
 瑠璃光山茶師院の宝藏より出。来れる金岡の故画る。我那虎対
 治の功の。厄釋け。還る。及び。亦石茶師堂あり。且地方の名を負して
 石茶師とも喚ば。思へ。有繫。感る。約。我生博識。世の人
 並佛菩薩。信媚。冥福を祈る。思ひ。這堂。扉あり。



馬を走り
せし廣當
親兵衛を
追ふ



是も故あはれとるらん騎拍せん快くも一霎時あやうと隄んむと詞のきき言
 らるる本後方小騎馬の武士あり足掻を早めて追蒐あつその馬蹄の立日近
 つく程小忽地聲を震きて大江生權且住と救使々々と喚被けり是れぞ
 敬馬く這方の主僕ハ存一佐と見へれ但見る其武士の京様る頭ゆる
 立鳥帽子を戴たる縹緋の大紋の直垂の両袖を巻絞りて盆窪の上小
 純ね長袴の下と仰く引折る腰小螺鈿の両刀と瑞長佩做し桃花馬小
 初木地の鞍の銀あぐ磨出ま波濤知鳥あふ真紅の長總曳せ乗た
 下ける是則別人をぞ秋條將曹廣當へ親兵衛の思ひける豫面善る廣
 當が遙けも今追蒐來ぬ事のあるをいふれも救使と叫ぶをせよりの早
 も馬よりの降立ち路上小迎れ代四郎と紀二六と喜勘太の其後方小居り
 兵並小伴當們的皆一列に跪坐する開が中か鎗奴の津の中る松の像鎗

衝達ぞぞゆりける既中々廣當の間十丈許ふるり一時徐る馬の勒を緩め
 招く便面を腰小夾め徐々と近づて來る石茶師堂の頭ゆる馬より閃りと
 下す代四郎則伴の奴隸其馬の鑣を合せり樹下は敷糸まき紀二
 六も腰ゆる馬柄杓を抜出して茶師の石の水盤の水を汲み馬小飼ふ長
 途の疲労を勒せり當下秋條廣當の親兵衛うち向ひ一會以來犬
 江主恙もあらざいと芽出さ今番勅詔をりまよふら咱若火急の御使を
 奉りて汗馬小鞭を鳴らり來りあやう追着れ正小公私の幸いさうりと
 いへども路次ゆる勅詔を示さる見れば毎人の佛堂あり時小取て便宜る
 んといふ親兵衛跪居る頭を拾けり答るや思ひける救使の光臨白京
 へ召させぬとも辭ひぬるをいふ例早る中途の傳達望御の情已る
 死を憐せぬ幸ある上の幸小そい誘めといひも後方を急ふれれば代

四郎紀二六あるるて俱小身を起し坐して茶師堂小建る箇子小両手を拭き
推開れど左右別れ跪坐して登時秋條廣當の長袴の下括を三里の下ま
解緩ゆる佛堂より升り徐四下と見通りし。躬々上座小着し親兵衛
も推續して找入る朝ひ居り。這堂の廣陝九尺二間の過は則正の臺座
や石像の薬師一佛立ぬ。其佛前より臺盤あり左右の花瓶小茶草と
寒梅花を供し中央小青磁の香爐の烟絶るあり又方素長脚托の滾
落て賽銭櫃の側小在るあり是の餅を供し燧石の像小缺る餅は
固けるが一両箇の頭小ありけり。そより這方左右の板壁あり色々る画
額を多く打する。故にあり新しあり大なるも小なるも各々願主敬白病厄平安
祈処と録し。余の餘の堂の簷下の鰐口の鉦を吊るの。看主の僧の在る
る。及て便宜とも思ふ廣當の威儀儼然と親兵衛小告るや。大江生業のね這

回和殿が奇虎を對治の大功並奇異の事の趣と昨日政元官領の告謝小
よる室町殿則奏聞あり。く敬感特小浅く。尙那親兵衛微り。都下の
良賤いなき。今安堵の思ひを做さ。宜く勸賞あるべし。と仰出さるふより。公
卿猛可詮議あり。臨時の除目とせられ。則和殿小從六位上を授けぬ。兵衛
尉小成さる者也。おの皇京へ召復し。仰渡さるべきも。他政元小抑留せられて
久く在京あり。今又召ん不便の至る。早く御使を遣きて。中途小恩勅を
傳へ。と義尚公の執奏より。躬々其美小儘せられ。則御使さる者。と擇ふ。小
愁小廣當の和殿と射藝の日。一面の交あり。と見え。且馬上遠者。れど。其撰
擇。元られ。往復の間五位の揚名小を假し。寮の御馬を賜り。宣言並
足利殿の御教書と受合なり。今朝も皇京を騎出ける。己の初対の時候
より。聞く。和殿の昨日大津より。政元主小辭し。別れ。亭午過る時候とい

へ既す不た是れ一は宿を隔らう。今もと追ひ込めんの心許多く思ひのろ馬の足挫小儘
 せ。直急然らいそ程小御馬実小逸物を千里の堪能行心に六伴當里比皆後れて
 續き我の一單冬の日のいま二時小過さる。慮二十里を走る一步愛小對
 面の本意を遂げ。欽び是小優まとり卒先宣旨と拜見あれと来意を示
 ち。懷より合み出し恭く遞與其親兵衛膝を找め受戴は左右
 る。開く急小四下を見る。臂近る。賽錢櫃の邊ありけ。方長脚托を
 引き塵吹拂く徐小これらち載く。且謹々拜見ま宣上日不道く。
 上卿萬里小路亞相 文明十五年十一月二十六日宣旨 里見安
 房守兼上總八源朝臣之使臣大江親兵衛金碗宿禰仁今般虎狀對
 治之大功有之事連 天聽為今古一人者也宜叙從六位上為兵衛
 尉 藏人右少辨藤原朝臣秋豐奉とあり。這宣旨小添られ是足利氏

將軍の御教書あり其文軍旅戰功の感狀小似く受領宜く勸慮小依るべき
 義尚の載られる。親兵衛這二通を閱記て舊唱の工思宜又長脚托らち
 載くそが儘まを返してお思ひける勅賞口命面目の上や外死あれ
 ども靈虎對治の一椿事の只是左京兆の為め。值偶の重小谷のと
 夫の義よりて東藩還ると饒され。是十二分の造化る。聖恩あ小及ば
 甘ん罪とゆべ階級といけれ。知那虎原の絹小入り。良賤安堵の思
 いを做せら。則是今上皇帝の御聖德及將軍家の御武德あり。臣等聊做
 正あり。主あくい義実義成父子忠孝の餘澤あり。わいひけん。徳れが臣等功小
 あり。功あらむと知り。這恩賞を稟まる。主を不して身の利を欲る後の
 患を争何いせんと辯ふを廣當推林め。然稟さる。臣子の道理謙遜辭
 讓ハ賢者の德誼人の及び所る。天の與るを取がれ。及く外口を受る。

古人の格言の條をわたりし和殿功を功とせむ其美を至尊奉り。その栄爵を
 辨ひ稟さば不敬の罪なりとまへども況御使を奉りて迫けりあまで追束
 我廣當何をりて反命を仕らんや枉く免業あるべしと諭を親兵衛推
 返してその美へ実不憚あり臣等も亦違勅の罪を思ひたるも約莫人の臣
 たる者ハ只其君を以天とま栄爵の湯易くぬもいふも我成小告むて恣不受ま
 つは是其君を不しぬ御驕臣のつまや且我身ハ憂を分ち樂を俱せんと折言
 い義兄弟七名あり然るも他名先も此栄爵を稟さば不義なれり
 甚しむ非如忠信の拘るるとも不義の人ハ多く欲せむ倘異日其の御上
 安房へ仰遣され義成御兼仕りて則叡慮台命に従ひなりと吟附らる
 ありともそれ我兄弟等と俱らざる尚辨ひ稟さし況や中途の御使を當
 惑心の外ひりむいで愚衷と亮查あらば御執成を願ふといふと諄返を淚坐

叱びまで不思ひ決り忠義の魂氣色言語見れり轉さるもわれ廣
 當發感嘆して黙然ると羊响許さるる類稀る忠誠
 義今の世も這賢少年あり我始も和殿の本事も見其武藝効力億
 萬人ハ勝るのまの心術も亦慈善と宗と仁と名ハ恥さるべしと思ひ尚疎
 今又廉直辨讓の勅答道理至極と覺れハ罪能返り其意の如く言
 上及ぶべし然りけれども倫言ハ汗の如く返さるべし安房へ救使を遣
 されて叡慮を果さるる思召まよりのまも戦世のいふせん天子將軍の
 御威福も仍れざる所われ再度の朝議言寝る世の人知ざるもやせ惜むべ
 どむべし宣旨と御教書と合抗りうち戴冠懐へ楚と夾ま親兵衛
 額徳たう頭を拾けり田舎見の一筋る愚直を憐查海容あ
 執納められ貴所の寛裕何の時わ忘るべし幸ひ是は優まると仁も亦始

よ。和君の進止を查する。小君子の風を知る。それを勸ふ。五虎の中。數々入らる。
 其の尾。疎小雜る。片玉を。思ひ。その果。て違ふ。然る。或は。今日の御使。尚
 別人。らん。我云。と。道理を。陳。辯。以。稟。も。も。听。き。く。權威。を。以。強。め。見。
 然。と。是。非。及。び。又。と。頭。加。え。死。して。志。を。果。さん。の。亦。せん。術。の
 る。む。其。境。暴。小。志。も。遇。さ。る。我。命。運。の。致。ま。所。致。併。君。が。賜。る。最。忝。く
 了。と。云。感謝。他。事。の。り。を。廣。當。听。く。點頭。然。と。その。の。れ。道理。の
 前。非。理。の。和。殿。の。推。辯。稟。さ。る。私。似。と。公。を。只。我。身。の。罪。を。怕。れ。て
 听。き。非。理。の。人。と。る。最。も。畏。れ。今。上。の。聖。君。小。御。座。を。且。室。町。殿。賢。相
 る。れ。恩。賞。信。々。の。美。より。約。れ。と。稟。も。も。反。く。御。感。ある。べ。ら。む。の。美。の。易
 似。と。尚。心。許。さ。れ。今。より。和。殿。の。去。向。を。信。濃。路。へ。赴。り。東。海
 道。より。還。り。の。と。同。れ。て。親。兵。衛。然。に。逆。の。岐。岨。路。より。と思。ひ。那。閑。今。の。事。の

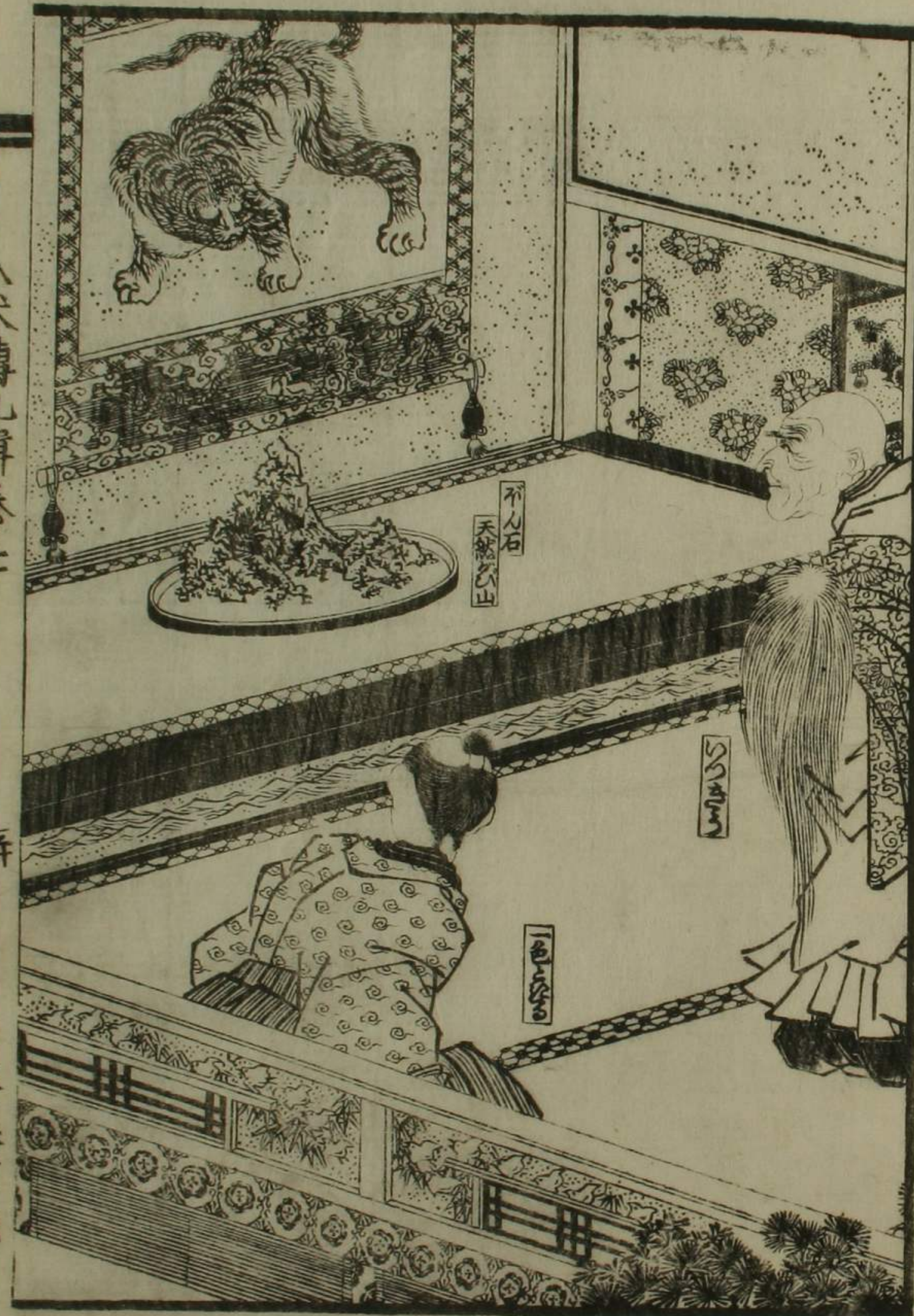
よ。料。ら。大。津。小。到。り。時。政。元。主。の。赶。り。東。海。道。より。還。れ。と。佩。る。驛
 鈴。を。借。賜。ひ。其。故。の。箇。様。々。信。々。の。便。宜。に。依。る。主。の。誨。の。あ。れ。と。生。口。を
 廣。當。ら。ら。せ。も。故。る。小。あ。わ。ね。の。我。思。ふ。い。あ。ら。む。東。海。道。の。伊。勢。尾。張。を
 除。く。の。外。皆。是。京。家。の。敵。地。之。縱。驛。鈴。を。も。て。ま。る。と。我。恐。り。尚。饒。さ。は。所
 あ。ら。む。且。其。驛。鈴。の。朝。廷。より。室。町。殿。へ。管。ゆ。り。其。數。則。十二。あり。一。も。欠。べ。ら。む。は
 至。宝。なる。小。政。元。主。私。して。一。箇。を。和。殿。小。貸。り。も。歸。東。の。後。早。く。還。さ。む。其
 罪。和。殿。の上。小。あ。ら。ん。嗚。乎。危。哉。と。の。れ。て。親。兵。衛。ら。ち。敬。馬。れ。我。疎。幽。り。知
 ざ。り。死。心。麼。い。小。あ。ら。む。好。ら。ん。や。と。向。ふ。答。ふ。然。と。今。思。意。を。も。て。後。の。患。あ。ら
 せ。と。る。その。驛。鈴。の。我。受。合。と。政。元。主。小。還。さ。む。信。ま。れ。只。和。殿。の。為。後。れ
 患。ひ。ま。れ。の。も。我。も。亦。和。殿。小。逢。て。勅。答。と。饒。さ。は。證據。小。做。り。後。易。け。ん
 然。と。又。和。殿。の。尾。張。より。路。を。横。ぎ。り。信。濃。上。野。を。歷。り。安。房。へ。還。り。の。尾

張へ斯波の領地へ美濃小土岐の信濃の村上木曾諏方の祝部の上
野武藏へ扇谷定正王の封域中は皆是京家の御方地入事の便宜を
猶且これあり。今番我御使を奉りて和殿の御方地を討ふ。孰の地中逢ふ
ば其遠近料をこれに官府の関符を賜りて懐かしくあるに在り。今に要る
は東西をれば是を和殿の御方地と。那御方地にて這関符ありて去向の障りあ
るべし。先よりの意を治めむと論せ。親兵衛感謝の堪む送る限多
知音の好情を以て教に従ふべし。や。あるに。と答へ。軀を腰を撈え
驛鈴を合出せ。裏の隨の遞與せ。亦廣當も懐より関符を出し。與
る當坐の交易閑談の果よけり。登時廣當天うち仰せ。今に一時程
ア。頃者の日の短さ。暮るる程のあ。所へ。卒に。俣別とて。今に。軀を
身を起せば大江の奴隷あるに。直に草履と牽寄る馬の邊に。今に。程の

親兵衛も亦送り出せ。秋篠王の伴當の後。今に。我伴當に
中雨三名。途も送り出せ。と。を廣當。あ。の。然。と。せ。せ
ま。今亦一騎とて。後れる者毎の末。不逢。其地方。駁を投ぬ。人
馬を。明日。皇京へ。参。り。馬。を。因。り。と。ち。踏。一
鞭中へ。走。る。を。一。霎。時。目。送。る。親。兵。衛。們。代。四。郎。紀。二。六。い。は。け。之。野。兵
伴當。推。並。く。只。願。心。を。感。して。己。錦。上。小。花。を。添。雪。中。小。炭。を。餽。る。情
義。両。面。を。う。け。り。鳴。平。御。使。を。哉。と。思。ふ。就。親。兵。衛。が。榮。利。を。欲
せ。忠。信。の。又。一。段。の。餘。聲。香。高。り。那。賢。を。上。知。る。を。治。め
けん。と。知。る。の。嘆。賞。を。う。け。り。詰。分。兩。頭。今。程。小。管。領。左。京。大。夫。政。元。を
大江親兵衛。別。ま。り。更。又。馬。を。走。ら。せ。て。即。日。京。師。へ。か。り。参。り。軀。を
花の御所へ。参。上。す。將軍。義。尚。公。へ。上。る。小。里。見。の。使。者。大江親兵衛

仁虎妖對治の大功ありし事の顛末又澄月直道が賀茂河原の勤役の頭
 人等と同志敵の事且那野兵們が逆謀の事又悪僧徳用堅削が墮落兇
 暴の趣まゝ其條々を漏れし事就中大江親兵衛の智勇類多功を稱て
 須復り虎の菊軸を憲覽入れ義尚公駭嘆し大なる積
 御管領畠山左衛門督政長を以て件の菊軸を禁裡御所へおぼせ
 覽ふ備ありし主上故に御感のあまり則戲慮不依る所公卿猛可詮
 議あり件の大江親兵衛仁に宜く恩賞あるべし詰朝秋篠將曾日廣當
 御使とて仁を路次へ趕しぬ既上より如く徳而其次の日
 廣當皇城へかへり來り則大江親兵衛が忠義の為罪を思へて官爵を
 辭しなけり言切りし箇様とて上へ宣旨を返し又室町殿
 へ件の義を告禀し御教書を返却せし主上と首なり義尚公も親

兵衛が違勅をバ外ありて反く其忠信の心操を御感愈淺く重く
 安房へ御使を遣さるべしと議せし東國も亦久く乱れ人馬の通
 路不便のゆゑあり然り百里の命を寄ると輒くざる所乃朝議果
 さるるたるを惜は者そよりける徳而廣當の日政元の邸に造りて對
 面を請ふ告るなり昨日在下御使を奉り那大江親兵衛を趕し石碁
 師堂へ對面の折他へ馮れるものひ其故に君が親兵衛へ貸ひと云驛
 鈴をのり他東海道をかへりとも歸國の後速く返しなせし其甚か
 かり然りとて這官鈴を留措く久く返しなせし我身の罪なる歟
 相公も亦之の受とりたるを為妙なりなり歟是も亦知るべし所詮
 危は東海道を過らんと信濃路へ赴くべし願ひ這御鈴を相公へ返
 せしめしむるに合出く在下下邊與り大江が遠慮宜し以り第一



不心石
天然の山

天竺心算

一色と云ふ



熊合後

一休偈を
 説て画虎と
 度と
 度と

憂^{うれい}怕^{おそ}れて遂^{つひ}久^{ひさ}く出仕^{でし}せむ亦^{また}病^{やま}着^つふ假^{かり}托^{たく}く管^{くだん}領^{りやう}職^{しやく}を辭^{やめ}し稟^{まう}あ^らぶ
 其^{その}顯^{けん}職^{しやく}を罷^{やめ}ら^ませ政^{せい}長^{ちやう}一^{いつ}人^{にん}管^{くだん}領^{りやう}は是^{こゝ}より後^{のち}三^{さん}松^{まつ}を歴^へく文^{ぶん}明^{めい}十^{じゅう}
 八^{はち}丙^{へい}午^ごの年^{とし}小^こ至^しる政^{せい}元^{げん}復^{ふく}管^{くだん}領^{りやう}はちやうな^な出^で頭^{とう}あ^らけるあ^らは是^{こゝ}後^{のち}
 話^わへ介^け程^{ちやう}小^こ那^なを瞳^{とら}の虎^この画^ゑ幅^{はく}へ獻^{けん}覽^{らん}を經^へく後^{のち}小^こ義^ぎ尚^{しやう}公^{こう}是^{こゝ}を却^{かへ}父^ふ
 東^{とう}山^{さん}殿^{でん}議^ぎへま^まあ^らせぬひ^ひ小^こ義^ぎ政^{せい}好^{こう}事^じの癖^{くせき}なれば愛^{あい}西^{せい}復^{ふく}り珍^{ちん}重^{じやう}して常^{じやう}小^こ
 坐^ざ右^う小^こ楮^{じゆ}さ^させ^せ其^{その}奇^きは誇^{こゝろ}りぬひけり悠^{ゆう}々^々程^{ちやう}小^こ有^ある日^ひ此^{こゝ}糸^{いと}野^のる大^{だい}德^{とく}寺^じの
 一^{いつ}休^{しゅう}老^{らう}和^わ尚^{しやう}と珍^{ちん}々^々小^こ杖^{じやう}を東^{とう}山^{さん}小^こ叟^{そう}路^ろ次^じの便^{べん}宜^い也^やよりけ獨^ど銀^{ぎん}閣^{かく}
 伺^{かゝ}候^{こう}して義^ぎ政^{せい}公^{こう}と要^{よう}法^{ぽう}禪^{ぜん}機^きの暗^{あん}譚^{たん}數^{すう}刻^{こく}不及^ふ及^及ひけり畢^{ひつ}竟^{じやう}一^{いつ}休^{しゅう}老^{らう}和^わ尚^{しやう}
 東^{とう}山^{さん}殿^{でん}小^こ見^{けん}參^{さん}あ^らける六^むの目^めの話^わ説^{せつ}甚^{じん}麼^ま也^や出^で像^{ざう}を小^こ載^{さい}き^きの^の猶^{なほ}
 詳^{じやう}不^ふ知^ちま^ま欲^{よく}く^くバ^バ开^{ひら}ち又^{また}下^{くだ}回^{かい}小^こ解^{かい}分^{ぶん}るを聽^きね^ねが^が。
 南^{なん}總^{そう}里^り見^{けん}八^{はち}代^{だい}傳^{でん}九^{きゅう}輯^{しゅう}卷^{くわん}之^の三^{さん}十^{じゅう}終^{しゆう}

